

2024年4月21日

主題「キリストという土台を据える」

ルカの福音書 6:46-49

序

今日も共に御言葉に耳と心を開いていきましょう。

1. 私の主

さて、これまでイエスの教えである「平地の説教」を2月から三ヶ月かけて読み進めてきました。細かく見ていったこともあって大分時間がかかりましたが、「貧しい人たちは幸いです」との教えから、今日の箇所に至るまでイエスを信じる者として、どのように生きるか、問われてきたかと思います。そして今日の箇所はその締めくくりであり、結びです。キリストを信じる者がどのように生きていくのか、それをイエスは最後の教えの中でもはっきりと語られています。それでは46節をご覧ください。

なぜあなたがたは、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。

初っ端から、また厳しい教えか、と耳と心が痛い...かもしれません。これはどういうことか、というと、イエスは「私の主」「私の神」である。あなたがもし、そのように信じ、告白するならば、イエスのことばを信じ、従いなさいと言っているんです。しかし、イエスを「私の主」である、と言いながらも、イエスのことばに従わないなら、それは口先だけで「イエスを主」と呼んでいるだけではないか、と指摘しているわけです。一見厳しく見えるこの指摘は、実は当たり前のことをイエスは言っているわけです。イエスは「私の主」です、と言っているのにも関わらず、イエスの言っていることを行わないというのは、矛盾でしかないわけです。私の主人は、イエスです。だけど、イエスの言っていることはしません、従いません、って言っているのと同じだからです。ですから、ここでイエスは、「ことば」と「行い」の一致、「言動の一致」について問われているんです。イエスを神と信じている、と言いながら、聖書のことばに耳を傾けないのはなぜか。自分の都合のいいところだけを取り出して、自分の都合の悪い部分には耳を閉ざすようなことはないか、私たちはそれぞれ心に問いたいんです。イエスが「私の主」であるならば、イエスの語られることば、神のことばである聖書が教えることを守り、行おうとするはずです。

しかし、「イエスは私の主」と呼びながら、イエスの教えを行わないことは、主人はイエスではなく他に在る、ということです。イエスのしもべ、のふりをした、自分を主人とした生き方と言えてしまいます。それでは、心からイエスを主と呼ぶ者とはどんな人のことでしょうか。それは、47節にあります。

2. 家の建て方

わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行う人がみな、どんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。

心からイエスを「私の主」とする人、つまり、イエスを信じ、従う人とはどんな人か。それは、イエスの「もとに来て」、イエスの「ことばを聞き」、イエスのことばを「行う人」です。そしてそれがどんな人かをここでたとえを通して示してくれている。48節。

その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せても、しっかり建てられていたので、びくともしませんでした。

心からイエスを「私の主」とする人。それは、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた人に似ている。そのような人は、洪水になって、川の水がその家に押し寄せても、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、しっかりと家を建てているから、びくともしない。ここでイエスは、家をどこに建てるか、ではなく、どのように建てるか、という家の建て方を教えています。ちなみに、平行箇所のマタイの福音書では、家をどこに建てるのか、という建てる場所について強調して教えられています。

ルカの福音書のこの箇所では、先ほども言ったように、家の建て方を教えています。どんなふうに建てるのか。それは、「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建て」る。地面を深く掘り下げること、岩の上に土台を据えること、これらは、その作業一つひとつがととも時間がかかるし、大変でしんどいし、労力がある。でもそのように家を建てる時、「洪水になり、川の水がその家に押し寄せても、しっかり建てられていたので、びくとも」しないんです。反対に49節にあるように、

しかし、聞いても行わない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家はすぐに倒れてしまい、その壊れ方はひどいものでした。

イエスのことばを聞いても行わない人は「土台なしに地面に家を建てた人」に似ている。土台も作らないし、岩ではなく地面に家を建てる。そのような家は川の水が押し寄せると、すぐに壊れてしまうし、壊れ方もひどいものであるのです。このように家を建てる人は、できるだけ楽しんで家を建てているように思います。地面を掘りもしないし、土台も据えない。家を建てる場所も岩ではなくて地面。人から見える場所だけ一生懸命頑張って作られたハリボテの家です。それは、パッと見るととても立派な家かもしれない。でも、土台がしっかりしてないから、「川の水が押し寄せると、家はすぐに倒れてしまい、その壊れ方はひどいもの」となってしまう。

結論 キリストという土台を据える

イエスが教えてくださるこの家の建て方のたとえから、きょう私たちはどんなことを受け取ることができるでしょうか。川の水が押し寄せても流されない家となるために必要な、「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てる」、とはどんなことなのか。

イエスの教えられた「地面を深く掘り下げる」こと。それは、自分の心、またそこに確かにある自分の罪と対峙することです。これって表面をサッと掘っただけでは出てこないんです。だからこそ、深く掘り下げる必要がある。それは自分の過去のことかもしれない、見たくなくて、ずっと目を逸らしてきたことかもしれない、深く掘り下げたくない、そういうところを痛みながら掘っていくということ。そして、自分という不安定な土台ではなく、岩であるイエス・キリストというどんな時も決して変わらないお方、を土台として、自分のブレない中心として、人生を建てあげていく。そうやって家を建てる時、その家は倒れないんです。そして、新約聖書のヤコブ 1:22-25 ではイエスのことばを聞くこと、行うことをこのように教えています。新約聖書のヤコブ 1:22-25。

みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となってはいけません。みことばを聞いても行わない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で眺める人のようです。眺めても、そこを離れると、自分がどのようなようであったか、すぐに忘れてしまいます。しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめて、それから離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならず、実際に行う人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。

神のことばを行わないこと。それは、自分を欺いていることだと聖書は語ります。なぜなら、聖書の語ることばは本当の自分を映し出す鏡だからです。聖書のことばを聞くとき、弱き私が見えてくる。そんな自分が映し出されてた時に、眺めて見て見ぬふりをして、自らを

偽るのか。それとも、自由をもたらす完全な律法、神のことばである聖書を自分ための言葉として受け取り、みことばを行う人となるのか。

そして、みことばによって映し出された自分を見て、悔やみ、罪から離れることを願い、キリストを求めていく者となる。そういう日々の繰り返しの中で、私たちはみことばを「すぐに忘れる聞き手」ではなく、「土台なしで地面に家を建てる人」ではなくて、イエスを私の主としてみことばを行う人とされていくんです。地道で、苦しくて、時間のかかることです。自分自身を見つめ、深く掘り続けていくこと。自分の内側に目を向け、自らの人生をかえりみる。生きる意味、目的について考えること。自分の嫌いなところ、嫌なところ、自分勝手なところ。わざわざそんなこと考えるのって当たり前だけどしんどいです。それでも、私たちは神のことばに自分自身を照らし合わせていくんです。Iコリント 3:10-11にはこのようにあります。

私は、自分に与えられた神の恵みによって、賢い建築家のように土台を据えました。ほかの人がその上に家を建てるのです。しかし、どのように建てるかは、それぞれが注意しなければなりません。だれも、すでに据えられている土台以外の物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。

私たちの土台はイエス・キリストです。この土台がなければその上に何も建てることはできません。ここに私たちの土台がある。しかし、土台を作らずに家を建てた人にも実は土台があることに気付かされます。その土台とは、自分自身です。みことばを信じず、行わない人は、自分がこれまで培ってきた経験や価値観、生き方、がその人の土台となる。自分を信じて生きる、信じられるのは自分だけ、よく聞くことばです。私たちはこの価値観を、正しいこととして、かっこいいこととして、よく耳にすると思うんです。しかし、どんなに有名な人も、成功者と呼ばれるような人も、いつどうなるかなんて分からない。自分なんてもうダメだと思ふ日が突然やってくる。自分だけは信じられると思っていたのに、自分自身に絶望する日がくる。そう考えていくと、実はこの自分を信じるっていう土台っていつも不安定でグラグラなんです。

しかし、イエス・キリストを土台として据えたとき、私たちには永遠に変わることはない土台が与えられる。この土台によって建てられていく家は、自分の価値基準ではなく、変わることのないみことばによって建てられていく。神を愛し、人を愛することを求める生き方は、鏡に映る私を日々、キリストへと向けさせていく。自分自身にどんなに絶望しても、そんな自分を、いのちをかけて愛し、救ってくださる方によって、もう一度立ち上がる力をも

らうことができる。キリストが私の中心となり、いつしか私もキリストに少しずつ似せられていく。このようにしてイエスを私の主として心から生きていく時、この世の終わりの時、イエス・キリストがもう一度来られてさばきを行われる時、この家は流されることは決してありません。イエス・キリストを土台として生きるとき、川の水がやってきても、決してこの家は流されないんです。永遠のいのちが与えられる。この約束に信頼したい。

私たちは口先だけ、「主よ、主よ」、と呼ぶ者ではなく、また自分自身を人生の土台として生きる者でもなく、イエス・キリストという土台を据えたい。そして、本気で主を主として、みことばを聞くだけではなく、行う者へと成長していきたい、と心から願います。